

地域情報（県別）

【神奈川】「野球ドクター」の名広まり、開業後すぐに患者の9割がスポーツ選手に-馬見塚尚孝・ベースボール&スポーツクリニック野球医学センター長に聞く ◆Vol.1

2019年10月21日 (月)配信 m3.com地域版

野球選手を始めスポーツ選手の治療とサポートに注力する全国でも珍しいクリニックが2019年5月に開院した。神奈川県川崎市にある「ベースボール&スポーツクリニック」は、野球医学の第一人者であるセンター長の馬見塚（まみづか）尚孝氏が運営しており、患者の9割がスポーツ関係者だ。クリニックの特徴に目が向きがちだが、馬見塚氏は「野球医学とスポーツ総合診療でみんなを笑顔に！」をスローガンに掲げ、「専門家としての知識や技術そのものよりも、関係する皆さんの『笑顔』のためにクリニックを運営している」と話す。こんな思いを抱くに至った恩師の存在に触れつつ、目指す臨床医の姿を語った。（2019年9月18日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)

——まずはクリニックの概要についてお聞きしたいのですが、「ベースボール&スポーツクリニック」は院名の通り、野球選手を始めとしたスポーツ選手の治療やサポートを行っているのでしょうか。

はい。当院ではスポーツ選手の治療とサポートに注力しつつ、一般的な整形外科分野のお悩みにも対応しています。とはいえ、患者さんはやはりスポーツ選手が多く、現状では9割を占めます。ある日の患者さんの数を見ると、68人のうち20歳未満が37人で、20歳以上が31人。成人のうち60歳以上はわずか6人です。60歳以上のご高齢の方が中心になる一般的な整形外科とは明らかに年齢構成が異なっていることが分かります。

スポーツ選手のうち野球選手が占める割合は7割で、中にはプロもいますがほとんどが小学生から大学生のアマチュアですね。主訴としては多くが体の故障に関するもので、肘や肩、腰などの損傷を抱えた上でご相談されるケースが目立ちます。

野球選手の来院が多いのは、クリニックの名前に「ベースボール」という言葉が入っていることと、これまで野球選手を診察する機会が多かったためではないでしょうか。2006年から筑波大学硬式野球部で部長やチームドクターとして現場と医療の橋渡しを行うようになり、その後、野球医学関係の書籍を出版したり、専門誌で連載を持ったりするようになったほか、メジャーリーグ関係のテレビ番組にレギュラー出演して解説をする機会もあるので、一般の方からは「野球の先生」などと思われているのかもしれませんが。



センター長の馬見塚尚孝氏

——先生ご自身も野球をやっていたそうですね。なぜ医師の道に進んだのですか？

小学生のころにソフトボールを始めて、中学、高校、大学では野球部に所属していました。ポジションは高校まではショート、大学ではピッチャーを主にやっていました。

医学部に進んだのは母に勧められたからです。私は医師の家系に生まれたわけではありませんが、母が親心に当時の確実な道として医師を思い浮かべたのではないのでしょうか。高校時代は東京大学の野球部に入ることも目指してい

ましたが、現実的には現役合格は無理そうでしたので、母の希望を踏まえて琉球大学医学部を受験して進学しました。

——医学部を卒業した後に整形外科を専攻したのは、スポーツ整形に関心があったから？

野球日本代表のチームドクターになりたいという漠然とした思いはありましたが、悩みました。医師は進む科によっては人の命を救うこともできますから、当時カテーテル治療が普及し始めていた循環器内科は魅力的に映りましたし、また産婦人科の先生が熱心に私を誘ってくれたので、命の誕生に立ち会う同科もいいのではないかと思います。

結果的には、自分の直感を信じようと最初に思い浮かんだ整形外科を専攻しました。当時は「スポーツ医学」という概念が医学生にも知られるようになってきていて、私は「野球がうまくなるためにはスポーツ医学を勉強しなくては」と意気込み、一人で黙々と図書館で「臨床スポーツ医学」という専門誌を愛読、バイオメカニクスや栄養学などについて勉強していました。そういったことも診療科選びに影響したのでしょうか。スポーツと関係性が深そうでしたから、体育学群があった筑波大学の整形外科にレジデントとして入らせてもらいました。



武蔵小杉駅の近くにある同院の外観（クリニック提供）

——それからはどんな流れで整形外科医として経験を重ねていったのでしょうか。

医師になりたてのころはスポーツの診療に関わりたいたいばかり思っていました、実際は骨肉腫の患者さんの抗がん剤治療の準備や副作用への対応、高齢者患者さんの病棟管理などに追われていました。それから複数の関連病院で研修を受け、医師4年目から5年目に勤務した日立製作所水戸総合病院(現ひたちなか総合病院)で医長の中島宏先生に出会いました。これが、大きな転機となりました。

中島先生は脊椎疾患が専門ですが、人工関節や各種関節鏡手術、外傷に関する知識が豊富で技術もすばらしく、保存的治療から手術的治療まで幅広く行っていました。私はいつも隣のブースで外来をしていましたが、患者さんの話をよく聞いて丁寧に説明する先生の姿を拝見して、自分との実力差を痛感することになりました。

先生は患者さんだけではなくスタッフへの接し方もフラットで、私にも一方的に指示することはありませんでした。部下の主体性を尊重してその仕事を見守り、本当に必要なときにだけ手を差し伸べる。自分の伝えたいことを話しつつも、相手にも「どう思う？」と意見を求める。対話を通して人間関係を築くコーチングの手法を当時から自然に行っている方だったのです。

——それは魅力的な先生ですね。開業医としての先生の姿勢にも影響を与えているのではないかと思います。

そのような先生の行動に気づいたのは、本当にここ数年のことです。私自身、野球界の厳しい「上意下達」の世界で生きてきて、「上が言ったことを下は黙ってやるべき」と思っていました。中島先生のところで研修を終えてかなり経って、やっと当時の先生の教えを理解できるようになってきたと感じています。「開業医」に限りませんが、コーチングを通して患者さんやスタッフと連携する理想のモデルとして、中島先生から学んだことは多くあります。

中島先生との出会いをきっかけに私もスポーツ整形外科という専門領域を目指すのではなく、目の前の患者さんのニーズに幅広く対応する「ジェネラリスト」として診療する方向に舵を切りました。一旦、スポーツドクターを目指すことを止めたのです。その後、曲折があってジェネラリストからスポーツ整形外科医、それを超えて野球医学の専門家としての顔も持つことになりました。取材の場では野球医学について聞かれることが多くそれはうれしいことですが、現在、「野球医学とスポーツ総合診療でみんなを笑顔に！」という理念を掲げてやっているのも、中島先生との出会いがあったからだと思っています。

◆馬見塚 尚孝（まみづか・なおたか）氏

琉球大学医学部卒、筑波大学大学院修了。医学博士。専門は野球医学。筑波大学の関連病院で整形外科医として臨床経験を積みながら、筑波大学硬式野球部のチームドクターとして野球現場の実際を吸収、診療に生かしてきた。その後、スポーツ選手の治療やサポートには内科領域を踏まえた対応が必要だと実感し、2019年5月に神奈川県川崎市中原区に「ベースボール&スポーツクリニック」を開院。現在、「スポーツ総合診療科」をテーマに掲げて食欲不振や貧血、月経困難症、低身長などの悩みにも応えながら選手の治療と予防、育成に携わる。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

